

第4章

プログラムを実施する仲間を募る

1 節 講師養成研修会と考える会

教育プログラムの普及啓発のためには、教育実践の場所を開拓すると同時に、学校からの要望に応じて授業を提供できるように講師の体制も準備しておくことが重要です。そこで、私たちは、講師養成研修会を開催し、講師として授業を提供できる体制を整えることとしました。2007年度からはじまった研修会への参加者数は、延べ500名以上にのぼります。

講師養成研修会に参加される方は、第2章で述べたように、学校MHL教育へのニーズが高く、「MHL教育をやってみたい!」「関心はあるけれど、何からはじめたらよいのだろうか?」という熱い思いをもっています。単なる研修会という形にとどまらず、熱い思いをもった人たち同士が出会い、自分の地域で学校MHL教育活動を展開するきっかけも提供できれば実りある研修会になると考えました。このような考えから、研修会の後半には参加者全員が集まり、研修会の主催者やスタッフとともに「学校MHL教育について考える会」と題した時間を1～2時間程度、必ずもつようにしていました(表1)。

「考える会」では、最初に参加者1人ひとりがマイクを手渡され、自己紹介や参加したきっかけなどを話します。全員の発言が終わったところで、次に地域ごとに4～5グループに分かれます。各グループ内で改めて自己紹介するとともに、自身が抱えている学校MHL教育に関連した問題意識について意見を交換しあいます。スタッフは各グループにファシリテーターとして参加し、問題意識の共有をうながすとともに、今後の具体的な活動につながる話し合いとなるようにサポートします。参加者からの同意が得られれば、メールアドレスを記入してもらい、地域ごとのメーリングリストを作っています。研修会

表1 研修会プログラム

時 間	内 容	担当(敬称略)
9:00	スタッフ集合	事務局
9:30～10:00	受付	事務局
10:00～10:10	主催者あいさつ	研究会メンバー
10:10～10:40	総論1:必要性、研究的位置づけ	研究会メンバー
10:40～11:00	総論2:全体像の紹介、枠組み	研究会メンバー
11:00～11:20	各論1:教員プログラム	研究会メンバー
11:20～11:50	各論2:生徒1年生1時間	研究会メンバー
11:50～12:20	各論3:生徒1年生2時間	研究会メンバー
12:20～13:00	昼食	
13:00～14:00	グループワーク	
14:00～15:00	模擬授業	
15:00～15:10	休憩	
15:10～17:00	意見交換会(考える会)	

後の協力支援体制を作るためです。

スタッフは「考える会」の間、参加者から語られる内容から、その人がどれだけこの活動に参加したいと感じているのかを見守ります。研修会の最後に、参加者全員に対し学校MHL教育活動への継続的参加を呼びかけますが、参加者の中でも活動への意欲が非常に高いと感じられた方に対してはスタッフから改めて声をかけ、事務局の活動への参加なども案内します。このような講師養成研修会を経て、実際にプログラムに参加してスタッフとなる仲間は多くいます。研修会の開催ならびに「考える会」という方法は、仲間を募るという点では有効であると感じています。

なお、メールアドレスなど個人情報を集めた場合には管理をしっかりと行うこと、メーリングリストを作った場合にはフォローアップをこまめに行い、教育の機会などの情報を提供するようにしましょう。

2節 地域全体に働きかける(シンポジウム・フォーラム)

シンポジウムやフォーラム、講演会、学会などの機会を利用して、学校MHL教育活動について周知する活動も行ってきました。関東地方だけではなく、関西や東北地方、東海地方などへ足を運び、学校MHL教育に関心をもっている方たちと多く出会いました。

これらの催しに参加する方の職種や背景は、一般市民の方だけではなく、教育職の方、福祉関係者、医療関係者などさまざまです。インターネットが普及した現代だからこそ、

直接足を運んだ先で得た情報や、手に入れたチラシの内容は貴重なものです。こうした場を利用する際には、発表内容や配布資料に、活動する仲間を募集していることを明記し、アピールするようにします。学会でワークショップを開く際には、研修会同様に関心の高い方が集まっていると考え、積極的に活動内容の紹介をしてもよいかもしれません。

3節 特定の対象者への働きかけ（職能団体との連携）

学校 MHL に関心の高そうな専門職が集まる団体、いわゆる職能団体に働きかけて仲間を募ることも有効です。たとえば、看護師の職能団体の1つである「一般社団法人 日本精神科看護協会」（以下、日精看）は、社会貢献を後方的に支援する目的で協会事業として「こころの健康出前講座」（以下、出前講座）を展開しています。私たちの場合、日精看の地方支部に本教育プログラムへの参加を呼びかけたところ、協力を得ることができました。

表2に、参考資料として、日精看による出前講座の実態に関する調査結果を引用します。

これらを考慮すれば、精神科看護師はすでに教育による具体的な有益性をイメージできていると思われます。

一方、「教育機関での出前講座の実施がない理由」として、広報が不足している（58%）、講師がいない（10%）、組織体制が整っていない（10%）などの理由が多くみられました。また、学校での教育が必要であると医療・教育機関双方が思っているにもかかわらず、出前講座を行うための場所が確保できないこと、準備が整わないことから実現が難しいという背景もありました。今後、「専門家が不在である」という問題を抱える学校側と、「出前講座を実施する場所（学校）がない」という問題を抱える精神科看護師側がつながっていくためには何らかの力が必要となります。

このように、看護師にかかわらず職種ごとの詳細なニーズを掴んでおくと、参加協力の呼びかけ方の戦略がわかるでしょう。職業をもちながら時間を作って学校へ出かけていくのは容易ではないと言いました。しかし、もし職能団体などさまざまな組織からの支援が得られる場合には、その職種にとって社会貢献の意味合いが強化され、職場での賛同が得やすくなります。結果として推進体制が強化されることが予想されます。

表2 日精看出前講座の実態に関する調査結果

(精神科看護師の出前講座の実態)

平成25年3月～4月にかけて出前講座の実態について日本精神科看護技術協会の都道府県支部を対象に調査を行った結果から「精神科看護師が教育機関で出前講座を行うメリットは何か」の問いには、下記のような回答が得られました。

【啓発によって期待される効果】

- ・精神障害をもつ人との接し方を含め地域の方々の理解を深められる
- ・精神疾患への正しい知識を身につけられる
- ・ネット社会により誤った知識や見解が氾濫しているため、それらを少しでも訂正できる機会が得られる
- ・精神科を身近に感じてもらえることが、うつなどの早期受診、早期回復につながる
- ・こころの健康について考える機会になる
- ・病気でなくても落ち込んだりすることは、子どもからお年寄りまで誰にでも起こることだと知ってもらうことで、こころの病気・メンタルヘルスについて啓発できる
- ・「精神科」のとらえ方を変えることでメンタルヘルスのより深い理解に結びつけられる介入者となればよい
- ・精神障害者が地域社会で暮らすうえでの問題などを知ってもらえる
- ・こころの健康を考え、「命の大切さ」を伝えることで問題解決につながる

【専門家としての視点】

- ・臨床での体験を踏まえて話すことができる
- ・精神疾患、障害の正しい知識を伝えることができる
- ・具体的な事柄を伝えることが可能なため理解してもらいやすい
- ・身近な話題から話ができるのではないか

【結果として期待できる効果】

- ・看護の質の向上
- ・講師としての自信が自己のレベルアップにつながる。また看護の魅力を伝えることができることや、予防的な働きかけができる
- ・早期に精神科疾患に対する理解を深めることで偏見の軽減につながる
- ・精神看護の理解を深め、精神科看護師の認知度やイメージをアップできる
- ・自殺抑制につなげる
- ・精神疾患をもつ人への理解が得られる